

## 論文の要旨

論文題目 清末政治小説における明治政治小説の導入と受容  
——日中近代文学交流の一側面——  
氏名 寇 振鋒  
学位 博士（文学）  
授与年月日 平成 19 年 3 月 23 日

日清戦争（1894～1895）の敗北は、清国の朝野を震撼させたとともに、日中両国間の従来の師弟のような地位を逆転させた。そして文学分野においては、明治日本から導入された政治小説は、中国における小説というジャンルの地位を逆転させ、文壇盟主の地位にまで押し上げられた。新旧交替の転換期において、明治日本から導入された政治小説は、過去をうけて未来を開くという役割を果たしたと言える。

明治政治小説の導入、およびその影響を受けて創作された清末政治小説は、清末の「小説界革命」の源泉、且つ強い後ろ盾である。

本研究は三部の構成をとり、各章は以下のように構成されている。

第 I 部（第一章～二章）は、清末政治小説における明治政治小説の術語、概念の導入、およびその理論の受容について検討した。

第一章において、清末における政治小説の術語、および概念の、明治日本からの導入過程を確認した。

『清議報』創刊号所載の漢訳『佳人奇遇』と、その序言としての「訳印政治小説序」は、中国の政治小説の初登場を示している。なお、中国初の独自の政治小説『新中国未来記』はまた、横浜で創刊された月刊小説誌『新小説』の創刊号より連載を開始した。清末政治小説の術語、概念の形成に関する一連の試みは、すべて明治日本で行われたものである。そのことを踏まえて、清末政治小説の形成における明治日本政治小説の術語、概念との関わりを明らかにした。

第二章では、清末政治小説の理論の形成における、明治日本からの受容を中心に考察を行った。

梁啓超の「訳印政治小説序」「論小説与群治之關係」はそれぞれ、初期と成熟期を代表する政治小説理論である。本章では、清末政治小説理論における「旧小説に対する否定について」「小説に対する新民の役割について」「小説は文学の最も上乘である」「理想派小説と写実派小説の分け方について」という主な四点にわたって、明治日本の小説理論から受容

の可能性を分析した。

第Ⅱ部（第三章～五章）は、政治小説の原作と漢訳本の比較を通して、清末中国における明治日本から導入された政治小説について考察し、明治政治小説導入の軌跡をたどった。第三章では、清末『新小説』誌における『回天綺談』を明治政治小説『回天綺談』に照らし合わせて、その導入の関連事実を明らかにした。

明治政治小説『回天綺談』を『新小説』誌中の『回天綺談』に照らしてみると、翻訳上の増減、および改変などの部分が若干見られるが、ほぼ内容は一致していることが明らかになった。なお、漢訳された小説の最後に「未完」と記されているが、実は、原作の十五回を十四回にまとめて訳しただけのものであることも明らかになった。他方、本章はこれまで指摘されていなかった訳者の実名が麥仲華であること、および翻訳、導入に際しての関係事実を明らかにした。

第四章では、清末の単行本政治小説『累卵東洋』が明治政治小説『累卵の東洋』の導入であること、およびその関連事実を考察した。

漢訳本『累卵東洋』は、柴四朗の『佳人之奇遇』と矢野龍溪の『経国美談』に続き、漢訳された明治日本の政治小説であり、そして、清末中国同時代の知識人によく読まれた一作品である。しかも、この漢訳本は、日本で刊行されたものとして、初めての洋装の単行本政治小説であることを確認した。また、原作を漢訳本に照らして、両者の異同等も考察した。そこで、従来の翻訳上の改削に関する指摘は、適切ではなかったことを明らかにした。また、本章では漢訳本の訳者、翻訳の動機、および思想内容などにおける関連の事実を考察した。

そして第五章では、清末中国における『三十三年の夢』の導入について検討した。

宮崎滔天の『三十三年の夢』は、政治小説としても見ることを確認した。漢訳本がもたらした、清末ないし民国時期の中国における影響を整理した。『三十三年の夢』の漢訳本は1930年代にかけて少なくとも十九版まで発行されたことが分かった。また、漢訳本『大革命家孫逸仙』『三十三年落花夢』の漢訳に関する一連の事実とその問題点を明らかにした。

第Ⅲ部（第六章～九章）は、両国の政治小説作品を対照して清末政治小説における明治政治小説の受容について考察した。

第六章では、清末漢訳小説『経国美談』と戯曲『前本経国美談新戯』を取り上げて、明治政治小説『経国美談』の導入から受容までの軌跡をたどった。

二つのジャンルにまたがる三つの『経国美談』の作者、訳者、編曲者は、その基本的思想において、社会改良を主張し、強力による改革に反対する共通点がある。作品には維新政治の回復を促進させようとする党派的改良思想があるほかに、愛国と救民を呼びかけた愛国、救民の思想も存在する。これらはこの三つの作品を貫く主軸であることを明らかに

した。このように血統を継ぐような継承関係を有するからこそ、原作は導入から受容まで受け入れられたと思われる。

第七章では、政治小説『新中国未来記』中の「志士」と「佳人」像において、明治日本の政治小説『佳人之奇遇』と『経国美談』からの受容を考察した。

『新中国未来記』における「志士」黄克強と李去病の形象には、『経国美談』中の志士巴比陀、威波能の姿がある。そして『佳人之奇遇』中の東海散士の姿も見られると思われる。なお、『新中国未来記』において「佳人」も登場する可能性が非常に高い。この「佳人」王端雲にはまた、『佳人之奇遇』中の「佳人」幽蘭、紅蓮の姿が見られる。そして『平等閣筆記』に描かれた謎の女性、および作者梁啓超の「ハワイの恋」の相手何恵珍の姿も見られると思われる。この三つの政治小説における「佳人」と「志士」像を対照し、これまで明らかにされていなかったその受容関係を指摘した。

第八章では、清末『新小説』誌における『洪水禍』において、明治政治小説『経国美談』からの受容を中心に考察した。

明治政治小説『経国美談』の記者周達がまた『洪水禍』の作者であって、受容の大前提が成り立つ。そして、両作品には、まくらにおける類似を始めとして、夢の描写、小説の本文に入る段階、出典明示及び史実と虚構の結びつけにおける類似、友人との偶然の出会い及び談話における類似、援助を求めるための演説及びその場面描写、登場人物のタイプにおける類似、新演義体の歴史的な政治小説としての類似、小説の大プロット、穩健思想における類似など十の類似点を通して、その受容の可能性を明らかにした。

そして第九章では、清末政治小説『\_ 海花』『痴人説夢記』『党人碑』『大馬扁』を取り上げ、『三十三年の夢』からの受容について考察した。

『\_ 海花』の最初の作者金松岑はまた『三十三年落花夢』の記者である。プロット、登場人物などにおける類似点からその受容の可能性があると思われる。『痴人説夢記』第十六、十七回のプロットは『三十三年の夢』中の「新嘉坡の入獄」のプロットとほぼ一致している。そして、登場人物から考察してもその受容を推測できる。『党人碑』と『大馬扁』における宮崎滔天、康有為の登場、および二人間の関係から、その影響の可能性があるとと思われる。同時代の革命的な人物を小説に登場させたこれらの小説は、当時、小説題材の拡大のために役割を果たしたと考えられる。

明治政治小説のように清末政治小説は、まず政治理想が托されており、また他方では、文芸の中心においてこれまで軽んじられてきた小説の確固たる地位を築き、広く世間にアピールした。政治小説理論の誕生が「小説界革命」の源であると言うとすれば、政治小説作品の出現は「小説界革命」の実践である。明治日本から導入された政治小説は中国近代小説発展の原動力となった。明治政治小説の導入がなければ、当時の中国の小説はどのように速く生まれ変わることはなかったと思われる。さらに、清末政治小説は二十世紀中国小説の起点であると言っても過言ではない。それゆえに、政治小説は正当に位置づけな

ればならない。清末政治小説における明治政治小説の導入と受容に関する研究は日中近代文学交流上において忘れるべきではない一側面と言える。